

# マリア・モンク『恐怖の暴露』序説

—19世紀前半アメリカの反カトリック主義とジェンダー—

佐藤 清子

## 1 序

私は何という場所に、なんという人々のところに入ってしまったのでしょうか！今や修道院は思い描いていたのとは何と違って見えることか！私は常に修道女たちを信仰深い女性たちであると思い、修道院長を尊敬してきましたが、彼女らは何なのでしょう？隣接する神学校の司祭たちのうちの幾人かについては、卑しく、放埒な人々であると考えるに足る理由が私にはありました。彼らは一体何なのでしょう。私はやっと、彼らが女子修道院に迎え入れられ、この上ない罪にふけることを許されていることを知ったのです。そして彼らや他の人々はそれを美德と呼んでいるのです。<sup>(1)</sup>

1836年が明けて間もなく、ニューヨーク市で一冊の本が出版された。『恐怖の暴露』と題されたこの本は、マリア・モンクという女性による、彼女の自伝の形をとったフィクションである。カナダのモントリオールのプロテスタント家庭に生まれたモンクは、カトリックの学校への入学をきっかけとして修道女となる。しかし彼女は後戻りができなくなって初めて修道院の内部に隠されていた秘密を知らされた。禁欲を旨とするはずの修道女たちは聖職者たちの意のままに性的暴行を受けており、生まれた子どもは殺されて地下の墓場に埋められる。宗教的苦行や罰の名の下に監禁、拷問、さらには殺人が行われ、それらの事実を秘匿するために、嘘が多用される。修道女たちは無知と迷信のために修道院とカトリック教会の論理を鵜呑みにし、その支配に抗することができない。モンクはそうした中、自らも妊娠し、子を守るためにニューヨークへ逃亡して、その事実を暴露したのだという。荒唐無稽な内容は全くの作り事であることがじきに証明されたが、それでもこの本は一躍ベストセラーとなり、題名を微妙に変えつつ、さかんに再版されてニューヨークのみならずアメリカ全土で読まれ、さらには海外に伝わった<sup>(2)</sup>。この内容を信じ続けた読者は少なくなく、『暴露』はアメリカ合衆国の反カトリック主義を長きにわたって煽ることになる。

19世紀前半のアメリカ合衆国においてモンクの『暴露』が社会的な影響力を持ったのは、その内容が歴史的、同時代的に存在していた文化や宗教に関する暗黙の合意に則っており、カトリックに対する多数派プロテスタントの偏見や疑念を裏付けるようなものであったためである。このマリア・モンクの『恐怖の暴露』および、その他の「逃亡修道女物語」については、近年、宗教

史、ジェンダー史、および文学研究といった分野からの考察が進められている。本稿は、これらの研究を参照しつつ、『暴露』読解の為の補助線として、アメリカ合衆国における反カトリック主義の歴史、19世紀における「真の女性らしさ」の崇拜、「逃亡修道女」物語の流行という3つを示すものである。

## 2 アメリカ合衆国における反カトリック主義

19世紀の反カトリック主義は、同時代のアメリカ合衆国に固有の背景とともに、ヨーロッパに淵源を持つ長い宗教間の対立を抜きにしては考えられない。北米大陸にはイギリスと前後して、フランス、スペイン、オランダといった国々が進出したが、その背景には経済的、政治的な利益の確保の他に、新旧両派の布教合戦がある。スペインはメキシコ側からフロリダやテキサス、カリフォルニア等に、フランスはカナダやルイジアナへ勢力を伸ばしたが、そこには常に原住民への布教を目的とした修道士の姿があった<sup>(3)</sup>。

アメリカ合衆国独立時の13州のうちの多く、特にニューイングランド諸州の建設目的は布教以上に植民者自身の信仰の自由であったが、ピューリタンの宗教的批判の矛先は、直接の迫害者であった英国教会だけではなくカトリック教会にも向けられていた。もっとも、宗教改革以来の反カトリック感情はアメリカに渡ったピューリタンのみならず、イギリスのプロテスタント全体に共有されていたと言ってよいだろう<sup>(4)</sup>。例えば、1536年、ジョン・フォックスはカトリックのメアリ女王によるプロテスタント迫害時の殉教者たちの伝記をまとめた『殉教者列伝』をはじめて出版したが、この本は19世紀に至るまで長らく英国およびニューイングランドのプロテスタントの間で読み継がれ、英語版聖書と英国教会の祈祷書に次ぐ大きな影響力を持ったと言われる<sup>(5)</sup>。さらに、一般的にはニューイングランドほど「宗教的」ではないとされ、本国同様英国教会が公定教会となっていたヴァージニア等、南部の植民地においても植民地拡大が原住民の改宗とキリスト教文明の拡大という宗教的な論理によって美化されていたことが指摘されている<sup>(6)</sup>。ヴァージニアに限らず、アメリカ合衆国独立以前の多くの植民地ではプロテスタントの公定教会が存在しており、とりわけカトリック教徒は市民権や信教の自由において様々の制限を受けていた。英国のカトリック教徒の避難地として建設されたメリーランドでさえも、多数を占めたプロテスタントと富裕層のカトリックの間で政治的対立が継続し、本国の政情の影響を受けつつ法的なカトリック差別が行われるようになった<sup>(7)</sup>。

また、イギリス植民地に接するカナダやルイジアナにはカトリック国フランスの植民地が存在していたが、17世紀から18世紀、ヨーロッパ大陸と連動した英仏植民地間の戦争は、プロテスタントとカトリックの間の闘争として理解され、植民地人のプロテスタント・アイデンティティと英国臣民アイデンティティを結びつけ、強化する役割を果たした<sup>(8)</sup>。その一方、1774年に出されたケベック法は、英仏間戦争の結果フランス領からあらたに英国領となったケベックのカトリック教徒に対して信教の自由を認めることで、後に合衆国を形成する13植民地と本国政府間の溝を深め、独立革命の一因となる。反カトリック感情や反カトリックの言説は、アメリカ革命のイデオロギーの中にも取り込まれていったのである<sup>(9)</sup>。独立革命時にはアメリカ植民地はカトリック

国フランスを味方につけて英国と戦ったため、反カトリック感情は一時沈滞するが<sup>(10)</sup>、独立後発布されたアメリカ合衆国憲法が、連邦レベルにおける国教樹立を禁じ、信教の自由を保障したとはいえ、州レベルでの政府による宗教の支援は19世紀前半に至るまで継続し、いくつかの州ではカトリックにとって不利な法律が残り続けた。20世紀に至るまで、プロテスタンティズムは社会の事実上の国教としての地位を維持し続けるのである。

19世紀にはいるとアメリカのカトリック人口は移民によって激増し、アメリカの反カトリック主義は変化を迎える。アメリカ独立革命と1812年からの米英戦争を経て産業革命を成し遂げつつあったアメリカ合衆国北東部の都市に大量に流入したアイルランド人やドイツ人の移民労働者のうち、アイルランド人の多くがカトリック教徒、ドイツ人も多くがカトリック地域の出身だった。とりわけ、アイルランドでの1840年代の大飢饉は彼らの渡米の大きな原動力となった。彼らの登場はアメリカ合衆国のカトリック教会の性格を変化させ、教会は移民が文化的、宗教的遺産を保持するための「移民教会」としての役割を果たすようになる。また、東部の都市部だけではなく、西部のフロンティア地域においてもカトリック教会は着実に勢力を伸ばしつつあり、そのこともまた、プロテスタントの危機意識を高めることになった<sup>(11)</sup>。さらに、19世紀において、アメリカのカトリック教会は必要な人数の聖職者を自前で供給することができず、多くの聖職者がヨーロッパ出身、もしくはヨーロッパで教育を受けていた。フランス革命以降の政治的変動をうけて、ヨーロッパの聖職者がアメリカへ亡命を行うという一連の動きも存在し、これもまた聖職者の間のヨーロッパの影響を強化する方向に働いた<sup>(12)</sup>。

すなわち、移民の増加と共に、アメリカ生まれのプロテスタントの人々にとって、カトリック教会はより一層ヨーロッパ的で、異質な存在として映るようになり、しかも活発な拡大を示すようになったのである。それに対して、プロテスタントの中からは移民やカトリック教徒の増加が独立後間もないアメリカ合衆国の存立を脅かしているという声が出始める。既に述べたように、アイルランドでの飢饉の影響から、カトリックのアイルランド人移民が激増するのは1840年代以降のことになるが、既に30年代からこうした声は聞かれるようになっていく<sup>(13)</sup>。

プロテスタントのアメリカ人の懸念の一因となったのはカトリック教徒が持ち始めた政治的影響力である。独立後のアメリカ合衆国においては、国政、州行政、地方行政レベルにおいてすでに選挙権付与に対する財産条項が廃止され、白人成年男子に対する普通選挙が認められるようになった。19世紀には外国人参政権こそ認める州は多くなかったものの、帰化は「白人」とされた人々にとって比較的容易であり<sup>(14)</sup>、移民の集中した地域では、彼らの政治的存在感は見逃せないものとなり始めていた。反カトリック主義者は、カトリック教会がローマ教皇を頂点とした階層的な権威構造を取っており、聖職者に大きな宗教的権限が与えられていることを指摘し、彼らの宗教的権限が世俗の事項にまで及ぼされることを懸念した。すなわち、カトリック教会は外国に中心を置く、反アメリカ的な組織であり、カトリック教徒は外国人である教皇の指示に盲目的に従う、アメリカの自由を脅かす存在だということである<sup>(15)</sup>。こうした趨勢に応じて、はじめは地方行政レベルから、反移民、反カトリックは政治的イデオロギーとして機能するようになり、1840年代以降には反移民、反カトリックを掲げ、「純粋な」アメリカ人のアメリカを守ろうとする全国レベルのネイティヴィズムの政党が誕生、1850年代には国政にまで影響を及ぼした<sup>(16)</sup>。

アメリカ合衆国の反カトリック主義は以上のような政治的、経済的な条件の下で発展したが、

忘れてはならないのは、その背景には宗教改革以来の神学的、思想的な議論が存在しているということである。プロテスタントは、教会論、救済論、聖人崇敬、修道制、サクラメントをはじめとする儀礼や装飾等、様々な面において、カトリック教会の伝統を、非聖書的で偶像崇拜的であるという神学的な見地から切り捨て批判してきた。さらに、啓蒙主義の影響は、その批判に非合理性への批判という新たな要素を付け加えた。フィリップ・ハンバーガーは19世紀にはプロテスタントが個人の知的、精神的独立を重視する個人主義的で啓蒙主義的人間理解を受け容れるようになったことを指摘し、さらにその際に、プロテスタントがカトリックという他者に不自由や迷信、非合理性といった反近代的な性格を押しつけることによって、自由と合理性を奉じる近代的な主体としての自己理解を獲得することが可能になったと述べている<sup>(17)</sup>。

なお、ここまでは主にプロテスタントの側の反カトリック的要素に注目してきたが、プロテスタント側がカトリックの神学や崇敬を異質なものとする一方で、アメリカ合衆国のカトリック自体がプロテスタントと自らの差異を強調するような動きを示していたこともまた見逃せない。既に述べたように、ヨーロッパ的なカトリック教会のあり方は、ヨーロッパ出身の聖職者によってアメリカ合衆国にもたらされつつあったが、特に1848年の革命以降、ヨーロッパを中心として影響力を強めた保守的なカトリックは、神学的にはトマス・アキナスに立脚して、近代の個人主義と個人主義を基礎にした市民革命を批判し、実践の面ではより熱心な崇敬や奇跡への信仰を促進した。彼らはさらにローマを中心とした教会組織の強化を図ることによって、社会の個人主義化に対抗しようとしていた。こうした動きは中心をヨーロッパにおいていたものの、その影響力はヨーロッパ出身、もしくはヨーロッパで教育を受けた聖職者たちによってアメリカ合衆国にもたらされつつあった<sup>(18)</sup>。また、特にアイルランド系移民の文脈で言えば、19世紀のアイルランドはイギリス統治下にあり、プロテスタントのイギリス支配に対抗する形で、カトリック教会への忠誠と結びついたアイルランド人としてのアイデンティティ形成が促進されていたことが指摘できる。その担い手となったアイルランドの中産階級によるカトリック・アイルランド・アイデンティティ形成の努力は、アメリカ合衆国のアイルランド人の間にも持ち込まれた<sup>(19)</sup>。さらに、アメリカ合衆国のプロテスタントの間に反カトリック感情が存在していたことは、カトリック教徒側のカトリックとしてのアイデンティティと、教会や移民グループへの忠誠心を高めることに貢献していたと見ることもできる<sup>(20)</sup>。

19世紀の反カトリック主義は、政治的、経済的、神学的、思想的な様々な背景のもと、プロテスタントのアメリカ人の間である一定の影響力を持ち、モンクの『暴露』はこれらを反映して誕生した。しかし、反カトリック主義の構成要素はこれだけではなく、その発展には当時さかんにとりかわされた、女性やジェンダー関係をめぐる議論が深く関わっている。モンクの『暴露』は、それが女性自身による、カトリック教会の女性虐待への告発の形をとっただけにより一層、反カトリック主義を煽る効果を持った。次節では、19世紀の反カトリック主義を支える主要な要素の一つである、当時のジェンダー観について概観する。

### 3 「真の女性らしさ」の崇拝

19世紀前半のアメリカ合衆国では、産業革命および商品経済の進展とともに以前とは異なる新

たなジェンダー観が生まれ、社会規範としての権威を獲得しつつあった。工業や商業が主な産業へと変化する中、自給自足中心の農業を中心とした社会においては明確な区分を持たなかった職場と家庭が分離され、家庭は生産の場としての機能を脱落させて専ら消費と再生産の場となっていく。それに従って男女の領域とジェンダー役割はこれまで以上に分化し、男性は昼間家庭を離れて働きに出る一方、女性は家庭に残り、家事と育児・教育を専らとするようになる。但し、この二領域の分化は、社会的な現実である以上に、その主たる担い手である白人の中産階級によって標準的で理想的であるとされた想像上の構成物であり、イデオロギーとしての働きを持つものであった<sup>(21)</sup>。

この二領域のうち、男性の領域であるビジネスの世界はより一層競争的で、利益拡大への欲望が積極的に肯定される場として意識され、ピューリタンの禁欲や奉仕の精神の後退が懸念された。その一方、女性の場である家庭は資本主義的価値観に抗し、文化と宗教を保存して次世代へ伝達する特別な場として、これまでになかった重要性を担わされた。女性には母、妻、そして家政を取り仕切る女主人として家庭の中心となり、家庭に託された価値観を体現することが期待されるようになる。バーバラ・ウェルターは、当時の女性のあり方の理想化を、「真の女性らしさの崇拜(the cult of true womanhood)」と呼び、その内容を敬虔、純潔、従順で家庭的であることと分析したが、中でも宗教的に敬虔であることは、他の徳性をも促進する女性らしさの核と見なされた。植民地期以来、アメリカ合衆国の教会は一般に女性の信徒が男性の信徒を数において上回っていたが、19世紀において教会は、家庭と共により一層女性の空間として認識されるようになり、様々の限界を抱えつつも、当時他の領域では許されなかった女性の公の場での活躍を許すほぼ唯一の場とすらなった<sup>(22)</sup>。

合衆国の中産階級を構成していたプロテスタントがこうしたジェンダー観をより一層強調するようになったことは、彼らのカトリック教会とカトリック教徒への疑念を深める背景となった。女性の本来的立場を家庭に位置づけ、家庭における女性の宗教的、道徳的感化力が男性を補完すると考えるこの理想の下では、男女共に結婚することが社会的に強く求められる。聖職者や修道女という、結婚せず、家庭を築かない男女を宗教的に優れた存在と考えるカトリック教会の価値観は、そうしたプロテスタント社会の価値観にそぐわない。独身制そのものへの攻撃に加え、独身制を建前として、カトリックの聖職者や修道女が秘密裏に婚外の性交渉を持っているのではないかという疑いは、反カトリック主義の書き手の最も好むテーマの一つとなっていた。また、家庭を中心に置き、夫であり父である男性が所属する女性を管理するという理想の下において、カトリック教会の秘蹟の一つである告解は彼らの権威を脅かす行為としてとりわけ攻撃の対象となった。夫や父親以上に女性の内心の秘密を知る男性がいるということは許されないことであると考えられた上、夫婦ではない男女が告解室という密室で話をすること自体に疑いの目が向けられ、告解における性的問題への言及が、彼らに誘惑とさらなる性的接触のきっかけを与えているのではないかと疑われた。こうした性的素乱が疑われないまでも、修道院長の下に女性のみが集団で暮らす修道院はプロテスタントが理想とした家父長権の支配の及ばない、相対的に自律的な女性の空間であり、プロテスタント的な規範から逸脱していた<sup>(23)</sup>。

しかし修道女に対するプロテスタントの反応は、単に否定的なだけではなかった。一方で修道女は正しい性のあり方を外れ、女性だけで集団で生活する職業女性という点で春婦とすら結び

つけられ、上述のような反カトリック主義の言説を生んだが、その一方で彼女たちは敬虔、純潔、従順といった徳性を、ある意味ではプロテスタント以上に体現した存在であり、プロテスタント女性の優位性を脅かしかねない存在でもあった。修道女たちはその全人生を宗教に捧げており、性生活を持たず、従順であることが求められ、家庭こそ持たないものの、アメリカ合衆国においても建設されつつあった修道院附属の学校や孤児院において、子どもを育み、教え導くという、家庭においては母親に、公立学校においては教師に対して割り当てられる役目を果たしていた。プロテスタントの女性たちは、カトリックの修道女たちが享受していた、男性のコントロールをある程度離れた自律的空間や、彼女らの公共の場での活躍のイメージを利用して自らの活動の場を広げようとさえしたのである<sup>(24)</sup>。

とりわけ、修道女たちが教師を務める、修道院附属の女子学校の存在はプロテスタント社会にとって脅威と思われた。19世紀前半は、公立学校の普及など、アメリカ合衆国における教育水準の向上が図られた時期である。女子の高等教育は男子のそれに比べて遅れていたが、子どもを教育する者としての母親の役割が強調されると共に、その重要性が認められるようになり始めていた。このころ、アメリカに建設されて間もない多くのカトリックの女子修道院は附属の女子学校の建設に力をいれており、数においても水準においてもプロテスタントの女子学校の有力な競争相手となっていた。彼らの学校はカトリックのみならず、プロテスタントの生徒にも開かれており、プロテスタントの子女に対してカトリック信仰が強制されることはなく、両親もそうした了解の下で娘を託していた。同時代に、ユニテリアンのような、リベラルな教派がマサチューセッツの知識層などを中心として勢力を伸ばしていたことも、カトリックの学校を両親にとっての有力な選択肢とする一助となった。修道院附属学校での教育は、カトリックへの改宗者や修道女の獲得にはそれほどつながらなかったが、少なくとも教師であり、監督者である修道女との人格的交わりが、改宗に至らないまでも、カトリックへの親しみを促進したことは想像に難くない<sup>(25)</sup>。カトリック学校の成功は、それに危機感を抱いたプロテスタントの女子高等教育機関の建設をより一層後押しすることにもなったが、教育上の努力に限らず、第二次大覚醒を背景に発展し、多くの女性の参加を見た様々な社会改革やミッション活動も、カトリック教会の組織的な伸張との競争関係の下で発展したことが指摘されている<sup>(26)</sup>。

修道女は、結婚して妻となり母となるという、プロテスタントにとって正しいとされた女性像に潜在的に対抗しうる、カトリック独自の女性の理想像であった。『暴露』は、修道女の性的純潔や宗教への献身を、その真実の姿を暴く、という形で貶め、プロテスタントの女性像の優位を読者に向けて強調した。モンクの修道院はカナダのモントリオールにあるとされていたものの、アメリカ合衆国においてもカトリックの女子学校は発展しており、学校から修道院へという人生の選択にはそれなりの現実味があったはずである。そうした中、何も知らぬままに修道院にはいったプロテスタント女性の哀れな末路を、被害者自身による内部告発として発信するという『暴露』の筋書きは、異なる主人公を据えて繰り返し語られ、「逃亡修道女物語」というジャンルとして考えることができる一連の作品を生むのである。

#### 4 反カトリック主義文学

マリア・モンクの『恐怖の暴露』は、反カトリック主義文学としてくくられる一連の著作の中の一つであり、販売部数と長きにわたる影響力のために代表的な作品として取り上げられる。19世紀のアメリカ合衆国においては、男女ともに初等教育が普及して識字率が向上すると共に、技術と商業の発展に伴ってより安価な印刷・出版が可能になりつつあり、多様な出版物の消費拡大が起こっていた。雑誌や新聞のような定期刊行物が増加したほか、小説などの芸術、娯楽的作品とともに、より商業色の薄い宗教的出版物もさかんに出版される<sup>(27)</sup>。その中であって、フィクション、ノンフィクション、もしくは、『暴露』同様、ノンフィクションを装ったフィクション、その他神学的、政治的な様々の反カトリック主義文学や、反カトリック的な主題を扱った新聞、雑誌もまた出版されるようになっていたのである<sup>(28)</sup>。その中でも「逃亡修道女」というテーマは、モンクの『暴露』以前にも存在し、反カトリック主義者によってしばしば取り上げられる題材であった<sup>(29)</sup>。

『暴露』以前で特に影響が大きかったのは、1835年に出版された、レベッカ・リードによる『女子修道院の6ヶ月』である<sup>(30)</sup>。著者リードは元修道女で、マサチューセッツ州チャールズタウンにあるウルスラ会女子修道院から逃げ出した過去を持つ。1834年、この修道院から別の修道女が逃げだし、その後もとの修道院に送り返されるという事件が起こった。町では彼女が監禁された、もしくは殺されたのではないかという噂が広まり、修道院および修道院附属学校の焼き討ち事件につながった。リードはこの事件の裁判に登場して、修道院の「秘密を暴く」証言をした後、虚実入り乱れた『6ヶ月』を出版し、商業的な成功を収めた<sup>(31)</sup>。1836年に出版されたモンクの『暴露』がリードの『6ヶ月』を意識して書かれていたことは間違いないが、逃亡修道女のテーマは南北戦争までにさらなる追従者を生み出し、文学的な定型のひとつとして定着した<sup>(32)</sup>。リードやモンクに続く数々の反カトリック主義文学を研究したスーザン・グリフィンのまとめによれば、こうした物語は典型的に、無垢なプロテスタントの少女がカトリックの修道院附属学校に入学するところから始まる。少女は告解を通して聖職者に精神的に蹂躪され、やがて誘拐されて修道院に閉じ込められる。もしくは少女は何も知らないまま修道女にあこがれを持ち、自発的に修道女となる。彼女は修道院内に隔離されて外界との交渉を絶たれ、逃げ場のないままに拷問のような苦行と労働、さらには聖職者との性交渉を強要される<sup>(33)</sup>。これはまさに『暴露』がとる筋書きであり、『暴露』はリードの『6ヶ月』とともに逃亡修道女物語の代表となった。

ジェニー・フランシヨによれば、これらの逃亡修道女物語は、より広いアメリカ文学の潮流の中に位置づけられる。中でもフランシヨが直接の関係性を見出しているのは、植民地期以来の伝統をもつ捕囚体験記(captivity narrative)および、ヨーロッパのゴシック文学である。アメリカ大陸においては植民地来以来の原住民とヨーロッパ人の対立の中、特にヨーロッパ人コミュニティが未だ脆弱であった時代に、多くの人々が原住民の捕囚となったが、そのうちのある者は助け出されて自らの体験を記述、出版し、捕囚体験記は一つの文学的形式として成立した<sup>(34)</sup>。一方のゴシック小説は、18世紀後半イギリスにおいて誕生した、主に恐怖や超自然的な出来事をテーマにした小説のジャンルである。「ゴシック」という語が示すとおり、近代人の中世に対する嫌悪と憧れが投影されたこれらの小説では、しばしば古城や古めかしい屋敷が舞台となり、幽霊等の超

自然的な存在が登場し、野蛮や暴力の要素が詰め込まれる。19世紀前半のアメリカにおいてはイギリスのゴシック小説が消費された他、アメリカ文学の成熟とともにアメリカン・ゴシックが書かれるようになる<sup>(35)</sup>。フランショは、アメリカン・ゴシックは、先住民の征服や奴隷制といった、捕囚のテーマと密接に関わるアメリカ独自の要素を取りこんで、ヨーロッパやイギリスのゴシック小説をアメリカ化することによって誕生したと分析している。プロテスタントのアメリカ人にとって、インディアンによる捕囚と解放と、そこにこめられた救済のテーマが、カトリック教会による精神的捕囚および修道院への女性の物理的捕囚からの解放および救済というテーマと連続性を持つというのである<sup>(36)</sup>。

しかし、ゴシック小説をはじめとする文学作品に表現されたのは、カトリックに対する嫌悪だけではなく、その抗いがたい魅力でもあった。アメリカ合衆国にロマン主義の影響が広がる中、カトリック教会が支配する暗黒の中世というイメージは、歴史的深みに彩られたロマンティックな想像の対象ともなり、非聖書のかつ物質的なものとして拒否されたはずの豪華な教会建築や装飾、音楽、壮麗な儀式を、美的な満足感を与え、宗教的感情をかき立てる魅力的なものとして、積極的に評価することが可能となっていく<sup>(37)</sup>。アメリカ合衆国のロマン主義の思潮に属する超越主義 (transcendentalism) への共鳴者の中から、多くのカトリック教会への改宗が起こったことは、当時の傾向をよく示すものだろう<sup>(38)</sup>。

但し、モンクの『暴露』のような反カトリック主義を主題とした作品においては、この魅力という要素は、カトリック教会による誘惑や幻惑というテーマに転換される。別の言い方をすれば、『暴露』のような反カトリック文学は、カトリックが持っている様々な魅力を暗に認めた上で、それを危険視し、プロテスタントの読者に対して注意を呼びかけたのである。鎖され、外部者にはうかがい知ることの叶わない修道院の中には、宗教的真相が隠されているように思われる。信教の自由が許されたアメリカにあって、無知なプロテスタントの若い女性はそれに魅了され、ついには自発的に自由を捨て、カトリック教会に身をゆだねてしまう。これが反カトリック主義者の危惧したところであり、逃亡修道女物語に表現されたところのものだった。カトリック教会のもたらす幻惑を破り、修道院を開放して真相をアメリカ合衆国市民の前に曝さなくてはならない。それは同時に誤った宗教からの、人々の、とりわけ女性の解放であり、救済である。『暴露』の商業的成功と長きにわたる影響力は、その内容がいかにか荒唐無稽に見えようとも、こうした主張がアメリカ合衆国のプロテスタントの心を捉える何物かを備えていたことを示している。

## 5 結び

最後に、紙数の都合から本稿が扱うことのできなかつたいくつかの点を列挙して結びとしたい。第一に、本稿では『暴露』に対して挙げた様々な反応を十分に取り扱うことができなかつた。『暴露』発表当時、支持者、批判者双方が、ジャーナリズムを通じて多様な意見を表明していた。中でもジャーナリストであるウィリアム・L・ストーンは、実際にモンリオールの修道院まで赴いた上で、モンクの描写が虚偽であることを証明する報告を行った。こうした報告が出る以前から、ただ単に内容を信じないだけではなく、当時であってはあまりに過激な内容を批判する声が存在していたことは重要である。その一方で、『暴露』出版の直後から、第二、第三のモンク



が現れてそれぞれの暴露本を出すなど、反カトリック的なメッセージを強化する動きも見られる。但しそこには、反カトリック本の出版によって商業的成功を得ようという意図が見え隠れしており、モンクの本自体も、それ以外の様々な関連出版物も、当時の資本主義社会の文脈の中で理解される必要がある。とはいえ、モンクの本を読んだ全ての人がその内容を頭から信じ込んだというのは無理があるにせよ、モンクの本は様々な出版社から版を重ねて売れ続けたという事実は無視できない。もう一つ、本稿が十分に扱うことができなかったのは、反カトリック主義と、当時の奴隷制をめぐる議論の連関である。1850年代において、ネイティヴィズム運動は、奴隷制をめぐる南北の対立が激化するにつれて下火になるが、アメリカの自由の意義が問われた奴隷制の議論と並行して存在した、宗教の自由をめぐる議論がいかなる関連性をもつかは未だ十分な考察が為されているとは言い難い。

独立革命を経て、アメリカ合衆国は共和国となり、その憲法は国教樹立を禁じて信教の自由を保障した。19世紀の前半を通じて各州も公定教会を廃止し、13植民地設立当初から存在した宗教的多様性は法的な存立基盤を与えられたことになる。そうして生まれた宗教の自由市場の中で、同時代的かつ歴史的な文脈の中で形成された様々の偏見を背負うカトリック教会が発展をとげたことは、プロテスタントたちにとって、彼らの誇る合衆国の自由の意味と限界の再考を迫っただろう。異質な他者との共存が引き起こすストレスは、反カトリック主義という一つの形をとり、ときにそれは暴力事件や、政治的な排斥運動にもつながった。しかし、19世紀のアメリカ合衆国は宗教戦争の最中の近世ヨーロッパではなく、カトリック—プロテスタントの分断線に従った大規模な戦争や、政府によるカトリックへのあからさまな迫害は起こらなかった。アメリカ合衆国において、反カトリック主義はより密やかに、プロテスタントの言説の中に陰に陽に埋め込まれる形ではたらいたのである。例えば、ハンバーガーのような研究者は、19世紀におけるプロテスタントの政教分離原則の主張は価値中立的である以上に、政治と宗教を混同していると考えられていたカトリック教会への批判や攻撃の意図をもって主張されていたことを指摘している。それどころか、カトリック教会の存在と、その政治的影響力への懸念こそが、未だ曖昧であった国家と教会の関係性を、両者をより厳格に分離する方向へと発展させ、アメリカ合衆国的政教分離原則の形成に貢献したというのである<sup>99)</sup>。近年の研究が明らかにしたのは、この反カトリック主義的なプロテスタントの言説の中に、正しいジェンダー役割をめぐる議論が、根本的な深さをもって組み込まれていたことだった。19世紀のアメリカ合衆国における宗教を考える上で、この要素を無視することは不可能ですらある。『暴露』はこうした宗教的、政治的、社会的な文脈の中で書かれ、同時代に共有された価値や各種の想定を巧みに織り込むことによって、その内容に一定の説得力を与えることができたのである。

## 註

- (1) Maria Monk, *The Awful Disclosures of Maria Monk, as Exhibited in a Narrative of Her Sufferings During a Residence of Five Years as a Novice and Two Years as a Black Nun, in the Hotel Dieu Nunnery in Montreal* (New York: Howe and Bates, 1836), 48-49. モンクの本は何度も再版が為

されているが、アカデミックなものとしては、Nancy Luisgnan Schultzによる解説が付された Rebecca Reed and Maria Monk, *Veil of Fear: Nineteenth-Century Convent Tales*, ed. Nancy Lusignan Schultz (Purdue University Press, 1999). 日本では巽孝之監修の下、Athena Pressから2005年に出された叢書、*American Gothic, Part I: 1820-1860, Gothic and Sensational Literature*の第五巻に収録されている。

- (2) 販売は、1836年7月までに26,000部、南北戦争開始時までには30万部に達した。Ruth Hughes, "The Awful Disclosures of Maria Monk," 1997, <http://www.english.upenn.edu/~traister/hughes.html>. Hughesはまた1836年だけで少なくとも6回の再版が行われたことを紹介している。筆者の見限りでは、1836年のうちにニューヨークの他フィラデルフィアとロンドンで出版が為されている。
- (3) 北アメリカ大陸、およびアメリカ合衆国におけるカトリック教会の発展については、James J. Hennesey, *American Catholics: A History of the Roman Catholic Community in the United States* (Oxford University Press, USA, 1983); Jay P. Dolan, *The American Catholic Experience: A History from Colonial Times to the Present* (Garden City, N.Y: Doubleday, 1985). 日本語で書かれたものとしては、高柳 俊一, "アメリカ市民社会とカトリック的伝統の展開—アメリカ・カトリック研究の必要性," 『ソフィア』 56, no. 1 (2007): 103-119.
- (4) イギリス史における反カトリックの研究はアメリカ以上に活発に為されている。例えば、Raymond D. Tumbleson, *Catholicism in the English Protestant Imagination: Nationalism, Religion, and Literature, 1660-1745* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998); *Catholicism and Anti-Catholicism in Early Modern English Texts* (Basingstoke: Macmillan, 1999); Arthur F. Marotti, *Religious Ideology and Cultural Fantasy: Catholic and Anti-Catholic Discourses in Early Modern England* (Notre Dame, Ind: University of Notre Dame Press, 2005); John Wolffe, *The Protestant Crusade in Great Britain, 1829-1860* (Oxford: Clarendon Press, 1991); D. G. Paz, *Popular Anti-Catholicism in Mid-Victorian England* (Stanford, Calif: Stanford University Press, 1992); Edward R. Norman, *Anti-Catholicism in Victorian England* (New York: Barnes & Noble, 1968).
- (5) John Foxe, *Foxe's Book of Martyrs: Select Narratives*, ed. John N. King (New York: Oxford University Press, 2009), xi.
- (6) Perry Miller, "Religion and Society in the Early Literature of Virginia," in *Errand into the Wilderness* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1956), 99-140; Edward L. Bond, "Source of Knowledge, Source of Power: The Supernatural World of English Virginia, 1607-1624," *The Virginia Magazine of History and Biography* 108, no. 2 (2000): 105-138; Brent Tarter, "Reflections on the Church of England in Colonial Virginia," *The Virginia Magazine of History and Biography* 112, no. 4 (2004): 338-371.
- (7) Timothy W. Bosworth, "Anti-Catholicism as a Political Tool in Mid-Eighteenth-Century Maryland," *The Catholic Historical Review* 61, no. 4 (October 1975): 539-563.
- (8) Mark A. Noll, *America's God: From Jonathan Edwards to Abraham Lincoln* (Oxford: Oxford University Press, 2002), 78-82; Thomas S. Kidd, "Recovering "The French Convert": Views of the

- French and the Uses of Anti-Catholicism in Early America," *Book History* 7 (2004): 97-111.
- (9) Francis D. Cogliano, *No King, No Popery: Anti-Catholicism in Revolutionary New England*, (Westport, Conn: Greenwood Press, 1995); Elizabeth Fenton, "Birth of a Protestant Nation: Catholic Canadians, Religious Pluralism, and National Unity in the Early U.S. Republic," *Early American Literature* 41, no. 1 (2006): 29-57.
- (10) Dolan, *The American Catholic Experience*, 101-124; Cogliano, *No King, No Popery*, 59-155.
- (11) Thomas W. Spalding, "The Catholic Frontiers," *U.S. Catholic Historian* 12, no. 4 (Fall 1994): 1-15.
- (12) Dolan, *The American Catholic Experience*, 127-346. なお、アメリカ合衆国における修道女の歴史もこうしたアメリカ合衆国におけるカトリック教徒の増加と軌を一にして発展を見せた。独立戦争以前において、将来のアメリカ合衆国の版図内での修道女の活動の記録は、当時のフランス植民地内におけるものに限られている。独立戦争後、1790年から1829年の間に、アメリカ合衆国には12の女子修道院が作られ、1つがルイジアナ購入によりアメリカ合衆国に組み込まれた。さらに1830年から1850年の間には、39の新たな女子修道院が作られた。これらの修道院の中にはアメリカ合衆国で新たに生まれた修道会によって運営されたものもあったが、ヨーロッパに中心をおいた組織のアメリカ支部として運営されるものが半数以上を占めていた。アメリカにおいて新たに形成された修道会、修道院もしばしばヨーロッパ人の聖職者によって指導され、また、その会則は既存のヨーロッパのものを参考するなど、ヨーロッパからの影響が皆無だったわけではない。ましてヨーロッパから修道女を送る形で移植された修道院においては、母国の慣習がそのまま持ち込まれる形で修道院が開始され、文化的な軋轢を招くこともあった。Mary Ewens, *The Role of the Nun in Nineteenth Century America* (New York: Arno Press, 1978); Barbara Misner, "Highly Respectable and Accomplished Ladies": *Catholic Women Religious in America, 1790-1850*, (New York: Garland, 1988); Carol K. Coburn, *Spirited Lives: How Nuns Shaped Catholic Culture and American Life, 1836-1920* (The University of North Carolina Press, 1999).
- (13) その中でも最も有名なものが、長老派牧師、ライマン・ビーチャー (Lyman Beecher) による、「西部のための訴え (A Plea for the West)」と題される説教である。ビーチャーのこの説教は、全米各地で為された後、1835年に出版された。Lyman Beecher, *A Plea for the West* (Cincinnati: Truman & Smith, 1835).
- (14) 高佐 智美, 『アメリカにおける市民権—歴史に揺らぐ「国籍」概念』 (勁草書房, 2003).
- (15) David Brion Davis, "Some Themes of Counter-Subversion: An Analysis of Anti-Masonic, Anti-Catholic, and Anti-Mormon Literature," *The Mississippi Valley Historical Review* 47, no. 2 (September 1960): 205-224.
- (16) 19世紀前半の反カトリック主義の起源、および政治化については、Ray Allen Billington, *The Protestant Crusade 1800-1860: A Study of the Origins of American Nativism* (New York: Macmillan, 1938). モンクの事件の中心となったニューヨークにおける反カトリック主義を19世紀前半まであつかったものとして、Jason K. Duncan, *Citizens or Papists?: The Politics of Anti-Catholicism in New York, 1685-1821* (New York: Fordham University Press, 2005). さらに、

- 1850年代のネイティヴィズムと奴隷制問題を扱った著作としてTyler Anbinder, *Nativism and Slavery: The Northern Know Nothings and the Politics of the 1850's* (New York: Oxford University Press, 1992).
- (17) Philip Hamburger, *Separation of Church and State* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2004), 201-219.
- (18) John T. McGreevy, *Catholicism and American Freedom: A History* (New York: W. W. Norton & Company, 2003), 19-42.
- (19) Maureen Fitzgerald, *Habits of Compassion: Irish Catholic Nuns and the Origins of New York's Welfare System, 1830-1920*, *Women in American history* (Urbana: University of Illinois Press, 2006), 16-23.
- (20) R. Laurence Moore, *Religious Outsiders and the Making of Americans* (New York: Oxford University Press, 1986), 48-71.
- (21) Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835*, 2nd ed. (Yale University Press, 1997); Barbara Welter, "The Cult of True Womanhood: 1820-1860," *American Quarterly* 18, no. 2 (Summer 1966): 151-174.; 小檜山ルイ「女性と政教分離」, 大西直樹, 千葉眞編『歴史の中の政教分離－英米におけるその起源と展開』(彩流社, 2006); 小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』(青木書店, 2010); プロテスタントの家庭観は19世紀後半になるとカトリック教徒の間でも広く受容されるようになる。Colleen McDannell, *The Christian Home in Victorian America, 1840-1900* (Bloomington: Indiana University Press, 1986).
- (22) Roger Finke and Rodney Stark, *The Churching of America, 1776-2005: Winners and Losers in Our Religious Economy, Revised and Expanded Edition, Revised*. (New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 2005), 38, 68-72; Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Knopf, 1977).
- (23) Jenny Franchot, *Roads to Rome: The Antebellum Protestant Encounter with Catholicism*, (Berkeley: University of California Press, 1994); Susan M. Griffin, *Anti-Catholicism and Nineteenth-Century Fiction* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2004); Marie Anne Pagliarini, "The Pure American Woman and the Wicked Catholic Priest: An Analysis of Anti-Catholic Literature in Antebellum America," *Religion and American Culture: A Journal of Interpretation* 9, no. 1 (Winter 1999): 97-128; Sandra Frink, "Women, the Family, and the Fate of the Nation in American Anti-Catholic Narratives, 1830-1860," *Journal of the History of Sexuality* 18, no. 2 (2009): 237-264; Maureen McCarthy, "The Rescue of True Womanhood: Convents and Anti-Catholicism in 1830s America" (PhD diss., State University of New Jersey, 1996).
- (24) Tracy Fessenden, "The Convent, the Brothel, and the Protestant Woman's Sphere," *Signs* 25, no. 2 (Winter 2000): 451-478.
- (25) Carol Mattingly, "Uncovering Forgotten Habits: Anti-Catholic Rhetoric and Nineteenth-Century American Women's Literacy," *College Composition and Communication* 58, no. 2 (December 2006): 160-181; Mary J. Oates, "Catholic Female Academies on the Frontier," *U.S. Catholic*

- Historian* 12, no. 4 (Fall 1994): 121-136; Nancy Lusignan Schultz, *Fire and Roses: The Burning of the Charlestown Convent, 1834* (Northeastern University Press, 2002), 80-81.
- (26) Ray A. Billington, "Anti-Catholic Propaganda and the Home Missionary Movement, 1800-1860," *The Mississippi Valley Historical Review* 22, no. 3 (December 1935): 361-384.
- (27) 革命後から19世紀の出版に関しては, Robert A. Gross and Mary Kelley, *A History of the Book in America: Volume 2: An Extensive Republic: Print, Culture, and Society in the New Nation, 1790-1840* (The University of North Carolina Press, 2010).特に宗教的な出版物に関しては, David Paul Nord, *Faith in Reading: Religious Publishing and the Birth of Mass Media in America* (Oxford University Press, USA, 2007); David Nord, *Communities of Journalism: a History of American Newspapers and Their Readers* (Urbana: University of Illinois Press, 2001).
- (28) 当時の反カトリック文学全体については, Billington, *The Protestant Crusade 1800-1860: A Study of the Origins of American Nativism*; Ray Allen Billington, "Tentative Bibliography of Anti-Catholic Propaganda in the United States (1800-1860)," *The Catholic Historical Review* 18, no. 4 (January 1933): 492-513.
- (29) 1833年に出版された, ジョージ・ボーン(George Bourne)の『ロレット(Lorette)』は中でも修道院内部暴露本の「プロトタイプ」とされる。David S. Reynolds, *Faith in Fiction: The Emergence of Religious Literature in America* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1981), 181. George Bourneはニューヨーク市における反カトリック主義の中心人物であり, マリア・モンクの事件にも関わりがあったと見られる。また, 1834年には, イギリスの作家, Mrs. Sherwoodによるフィクション, "The Nun"がアメリカでも出版されており, こちらもマリア・モンクに影響を与えたであろう事が推測されている。Hughes, "The Awful Disclosures of Maria Monk."
- (30) Rebecca Reed, *Six Months in a Convent, or, the Narrative of Rebecca Theresa Reed Who Was Under the Influence of the Roman Catholics about Two Years, and an Inmate of the Ursuline Convent on Mount Benedict*, (Boston, 1835).
- (31) リードと修道院焼き討ち事件については, Reed and Monk, *Veil of Fear*; Schultz, *Fire and Roses*; Daniel A. Cohen, "Miss Reed and the Superiors: The Contradictions of Convent Life in Antebellum America," *Journal of Social History* 30, no. 1 (Autumn 1996): 149-184; Daniel A. Cohen, "The Respectability of Rebecca Reed: Genteel Womanhood and Sectarian Conflict in Antebellum America," *Journal of the Early Republic* 16, no. 3 (Autumn 1996): 419-461.
- (32) Griffin, *Anti-Catholicism and Nineteenth-Century Fiction*.
- (33) *Ibid.*, 31-32.
- (34) Charles L. Cohen "Captivity Narratives, Indian." *The Oxford Companion to United States History*. Paul S. Boyer, ed. Oxford University Press 2001. *Oxford Reference Online*. Oxford University Press. Tokyo University. 7 November 2010 <<http://www.oxfordreference.com/views/ENTRY.html?subview=Main&entry=t119.e0246>>
- (35) "Gothic fiction" *The Concise Oxford Companion to English Literature*. Ed. Margaret Drabble and Jenny Stringer. Oxford university Press, 2007. *Oxford Reference Online*. Oxford University Press.

- Tokyo University. 2 October 2010 (<http://www.oxfordreference.com/views/ENTRY.html?subview=Main&entry=t54.e2561>) ; *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*, Cambridge companions to literature (Cambridge, U.K: Cambridge University Press, 2002) ; David Punter, *The Literature of Terror: A History of Gothic Fictions from 1765 to the Present Day* (London: Longmans, 1980) ; 八木 敏雄, 『アメリカン・ゴシックの水脈』(研究社出版, 1992).
- (36) Franchot, *Roads to Rome*, xxv, 87-88.そもそもイギリスにおいてゴシック小説と呼ばれるジャンルが誕生した時から、カトリックの要素は様々な作品に取り上げられてちりばめられ、その中には明確に反カトリック的な要素が含まれていた。アメリカにおいてと同様、反カトリック的な要素を含むこれらの小説は、イギリスのプロテスタント国家としてのアイデンティティ形成のために必要とされていた。Mary Muriel Tarr, *Catholicism in Gothic Fiction: A Study of the Nature and Function of Catholic Materials in Gothic Fiction in England (1762-1820)* (Washington, D.C: The Catholic university of America Press, 1946) ; Maria Purves, *The Gothic and Catholicism: Religion, Cultural Exchange and the Popular Novel, 1785 - 1829* (Cardiff: University of Wales Press, 2009).
- (37) Franchot, *Roads to Rome*, 197-273.建築史の立場からアメリカのプロテスタントのカトリック趣味を扱った著作として、Ryan K. Smith, *Gothic Arches, Latin Crosses: Anti-Catholicism and American Church Designs in the Nineteenth Century* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006).こうした現象もまた、アメリカ合衆国に限られたものではない。Maria Purvesは、これまでの研究がイギリスのゴシック小説に見られるカトリックの描写を、反カトリック主義の立場からのみ解釈してきたことに疑問を呈し、同時代のイギリス社会に存在したカトリックに対する寛容や、親カトリック的な議論がゴシック小説にも反映され、カトリックが必ずしも否定的に描かれるばかりではなかったことを示して先行研究の再考を迫っている。英米間の交流が具体的にどのように行われたのか、またこうした現象が、英米以外の地域でも見られるか、といった疑問へ回答を与えることは本稿の範囲を超えるが、少なくとも、両者の間には大西洋を越えた連続性が見られ、時代的にはむしろ英国が先行している。Purves, *The Gothic and Catholicism*.
- (38) Shannon Cate, "Transcendentalists and Catholic Converts in Emerson's America," in Linda Woodhead ed., *Reinventing Christianity: Nineteenth Century Contexts* (Aldershot, Hampshire, England: Ashgate) 2001, 105-113.
- (39) Hamburger, *Separation of Church and State*, 193-251.

# An Introduction to Maria Monk's "Awful Disclosures": Anti-Catholicism and Gender in the Antebellum United States

Seiko SATO

In 1836, a book called "Awful Disclosures," written by Maria Monk, a self-claimed ex-Catholic nun, caused a sensation in New York City. The book was full of awful details about the life in a convent in Montreal, where Monk once lived in and escaped from, and came to know the deeply hidden secrets, such as sexual abuse and violence. Although it soon became clear that Monk made up the story with a help from her male Protestant producers, many people nonetheless believed in the book. It became one of the most important anti-Catholic works throughout the nineteenth century United States. This paper presents three important factors that made Monk's book plausible to the contemporary Protestant audience, in spite of its preposterous and unsavory contents.

First, anti-Catholicism. A transatlantic anti-Catholic tradition among Protestants existed in the United States, which goes far back to the Protestant Reformation, even when there was no significant size of Catholic population in the country. In the early nineteenth century, Protestant Americans experienced a mass-scale immigration of foreign workers, many of whom were Catholics. Active expansion of the Catholic Church, mixed with ethnic and class conflicts, fueled the anti-Catholic feeling among American Protestants, which eventually led to organized political nativism in 1840s and 1850s.

Second, a gender norm of middle-class white Protestants. In the nineteenth century, a new kind of gender norm emerged, which was characterized by the separate spheres between men and women. While men work away from home, women stay domestic to take care of her family. The norm put a huge importance on home as a sacred place and fundamental unit of society, where women preserve and pass down the necessary virtue for the maintenance of the republic. Catholic priests and nuns were antithesis to this norm, as they remain celibate and live with their same-gendered peers, instead of marrying and making home. This significant difference in gender ideal deepened Protestants' doubt about the Catholic Church, and especially about their convents.

Third, contemporary anti-Catholic literature. In the early nineteenth century, not only Monk but many other authors published anti-Catholic books, tracts, magazines, and newspapers. Monk's book is located in the tradition of escaped-nun's story, which has a typical plot to bring an anti-Catholic message to the readers. These stories reflect not only Protestants' anxiety about the Catholic Church, but its irresistible fascination to them, which is expressed as dangerously enchanting and seducing power of the Church.

Monk's work reveals a way anti-Catholicism, a kind of religious intolerance worked in the antebellum United States, where everybody was supposed to enjoy full religious liberty, but what it really means was still flexible and debatable.